

学生海外調査研究	
バルトークによる 1926 年の自筆資料調査及び トカイ収穫祭における民俗音楽の現地調査	
氏名	木村 優希
	比較社会文化学 専攻
期間	2019 年 9 月 7 日～ 2019 年 10 月 8 日
場所	ブダペスト及びトカイ（ハンガリー）
施設	ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所バルトーク・アーカイブ、音楽史博物館、 バルトーク・ベーラ記念館

内容報告

1. 研究概要

報告者は、20 世紀ハンガリーの音楽家バルトーク・ベーラ¹Bartók Béla (1881-1945)が 1926 年に作曲した 3 つのピアノ独奏作品（《ピアノ・ソナタ》BB²88、《戸外にて》BB89、《9 つのピアノ小品》BB90）を対象とし、その作品分析を軸に博士論文研究を行っている。

バルトークは 20 歳前後まではピアニストを志していた背景も持ち、自身は主として西洋芸術音楽の教育を受けたが（羽仁 1970 : 28）、1906 年頃からハンガリーやその周辺地域（主にルーマニア、スロヴァキアなど）の民俗音楽の収集・研究も始め（伊東 1997）、その影響を色濃く残した作品を生涯を通して作曲した。中でも 1926 年は、上記 3 つのピアノ独奏作品に《ピアノ協奏曲第 1 番》BB91 を加えた 4 つのピアノ作品が夏以降集中的に作曲されており、直前の 1920 年代前半にバロック・古典派作品の編曲・校訂を行っていることや（伊東 2010 : (6)）、それまでピアノ独奏作品として積極的に創作していた「民俗音楽編曲作品」³をほとんど作曲しなくなることから（木村 2015）、彼の持つ多様な側面が交差する「バルトークの経歴において最も激しい転換点の一つ」（Somfai 1996 : 484）と言える。この重要な転換点で作曲された上記研究対象作品を、ピアニストとしての感覚、西洋芸術音楽（殊に古典作品）との関わり、民俗音楽との関わりなどから多角的に捉えることを目指し、報告者は研究・調査を進めている。

2. 本海外調査研究の概要と目的・対象・方法

本海外調査研究では、上記のような目的に基づき、以下 4 つの調査活動を行った。次節以降は、各調査活動について、それぞれの目的・対象・方法を述べる。

また、次節「2.1 バルトークによる 1926 年のピアノ作品の自筆譜調査」については、お茶の水女子大学文部科学省特別経費（国立大学機能強化分）「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」プロジェクト「学生海外派遣」プログラム平成 30 年度「学生海外調査研究」（以下、平成 30 年度「学生海外派遣」プログラム）の助成を受けて行った調査研究より得られた成果を引き継ぎ、さらなる調査を行うものである。

2.1 バルトークによる 1926 年のピアノ作品の自筆譜調査

第 1 の調査活動では、研究対象である 1926 年の 3 つのピアノ独奏作品の自筆譜の閲覧調査を行う。自筆譜とは、具体的には作品のスケッチや草稿、清書のための写し等バルトーク自身の手によって書かれた楽譜のことで、これらの自筆資料を調査することにより作品の成立過程を追うことができる。よって本調査活動は、研究対象作品の自筆資料を調査することにより、作品の成立過程を検討することを目的とする。研究対象作品の成立過程を検討することは、博士論文研究において作品分析を行う上で大前提となる、必要不可欠な調査である。

対象となる自筆資料は、次頁表 1 に示した全 17 種類の資料である（Somfai 1996 : 310-311 より木村作成）。これらの資料はほぼ全て、ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所バルトーク・アーカイブ（以下、「バルトーク・アーカイブ」と表記する）でのみ閲覧することができ、本調査活動においても当アーカイブを訪れて調査を行った。バルトーク・アーカイブで閲覧できる自筆資料は、原則複写不可、写真での撮影も禁止されている。そのため、閲覧した資料の内容について記録する際には、①文章でのメモを取る、②譜面が複雑な状況になっている場合には写譜をする、という 2 種類の方法をとった。

なお、バルトーク・アーカイブで閲覧できる自筆資料は、複写版（スキャンされたデータ資料や、白黒・カラーコピーによる紙媒体での資料）として保管されているものであるが、現物の資料を閲覧する場合とほとんど変わらない体験を得られるため、本調査活動の目的を遂行する上で問題はなかった。

【表 1: 対象となる自筆資料 (Somfai 1996: 310–311 に基づき木村作成)】

作品	《ピアノ・ソナタ》BB88	《戸外にて》BB89	《9 つのピアノ小品》BB90
自筆資料	スケッチ(1)	スケッチ(1)	スケッチ
	スケッチ(2)	スケッチ(2)	スケッチ+第一草稿
	第一草稿	第一草稿	第二草稿
	第二草稿	第二草稿	手書きの清書譜
	手書きの清書譜	手書きの清書譜	手書きの献呈譜
	手書きの訂正を含む印刷譜		手書きの訂正を含む印刷譜

2.2 『「バルトークとピアノ」音楽学プログラム』への参加

第 2 の調査活動は、『「バルトークとピアノ」音楽学プログラム』というシンポジウムへの参加である。当シンポジウムは、2019 年 9 月 8 日～15 日にかけてリスト音楽院で行われた「Bartók World Competition」に付随して開催された。「Bartók World Competition」は毎年行われている音楽コンクールで、1 年ごとにヴァイオリン、作曲、ピアノの 3 部門が交代で開催される。今年はピアノ部門の開催であったため、「バルトークとピアノ」というテーマで当シンポジウムも同時開催となった。

本調査活動の目的は、バルトークのピアノ作品に関する最新の研究動向を調査することである。当シンポジウムでは、代表的なバルトーク研究者 3 名による講義と、博士課程学生による研究発表が行われた。いずれもバルトークのピアノ作品に関わる内容であり、また研究発表の分析対象として推奨される作品の中には、博士論文研究の対象作品である《ピアノ・ソナタ》BB88 と《戸外にて》BB89 の 2 作品も含まれている。自身の研究テーマに近い領域で行われている研究の最新の動向を探ることは、博士論文研究を最新のものにするためにも必要不可欠であるため、これらの講義と研究発表を対象として、聴講という方法で情報収集を行った。

2.3 「トカイ収穫祭 2019」における民俗音楽演奏の現地調査

第 3 の調査活動は、「トカイ収穫祭 2019」における民俗音楽演奏の現地調査である。トカイはハンガリー北東部に位置する街で、貴腐ワインの産地として有名であり、毎年 10 月初旬に年間最大のブドウの収穫祭が行われている。本調査活動は、そのトカイ収穫祭で行われる民俗音楽演奏を対象とし、現在民俗音楽として演奏されている音楽の実態を知ることが目的とする。

本調査活動には 2 つのポイントがある。1 つは、ブダペストのような都市部ではない、地方にあるトカイで演奏される民俗音楽の調査であるということ。もう 1 つは、収穫祭という人々の生活に根差した場で演奏される民俗音楽の調査であるということ。バルトークは自身の民俗音楽収集や民俗音楽研究の際、都市部ではなく農村部で、農民たちが古くから受け継いできた民俗音楽を重要視した (岩城 1992)。今日ではブダペストのような都市部においても、民俗音楽演奏を見られるイベントが頻繁に行われているが、あえてトカイの収穫祭という場を選ぶことで、バルトークが重要視し注目していたものに少しでも近い状態の民俗音楽に触れられるのでは、ということが本調査活動の狙いである。バルトークが収集した、ハンガリーやその周辺地域（主にルーマニア、スロヴァキアなど）の民俗音楽には、リズムや拍子をはじめとして様々な点で特徴的な音楽が多く、日本に生まれ育っていたのではなかなか馴染みのない音楽となってしまうのは否めない。そのため、これらの音楽を現地で、そして生演奏で実際に体験することは、バルトークの音楽のより深い理解のために必要不可欠となる。

なお、調査方法としては、トカイ収穫祭で行われる民俗音楽演奏をホームビデオによって撮影、記録すること、また収穫祭の案内所で適宜聞き込みで情報を集めること等の方法をとった。

2.4 音楽史博物館及びバルトーク・ベーラ記念館

第 4 の調査活動では、「音楽史博物館」及び「バルトーク・ベーラ記念館」を訪問する。「音楽史博物館」には、ハンガリーの音楽史に関わる資料が展示されている。ハンガリー音楽史上に名を残す音楽家や芸術家たちの作品・資料の他、18 世紀半ば～20 世紀半ばに使われていた楽器についても実物が多く展示されている。本調査活動では、ハンガリー音楽史に関する重要な資料や、実際に使われて

いた楽器の様相を確認することで、バルトークが生きていた時代のハンガリーの音楽事情やその歴史的背景について理解を深めることを目的として、展示の閲覧を行った。

「バルトーク・ベーラ記念館」は、バルトークが1940年にアメリカへ亡命する直前に住んでいた家を活用して作られた施設で、主にバルトークが日常的に使用していたピアノやインテリア、衣服などが展示されている。施設内の展示は英語のガイド付きで閲覧することができるため、ガイドの方への質問等も適宜行いながら、バルトークのプライベートな側面への知見も深めることを目的として、展示の閲覧を行った。

3. 調査研究結果

以下では、上記4つの調査活動ごとに調査研究結果を述べる。

3.1 バルトークによる1926年のピアノ作品の自筆譜調査

本調査活動は、平成30年度「学生海外派遣」プログラムの助成を受けて行った研究調査の成果をもとに、さらなる自筆資料調査を行うものであった。そして昨年度に引き続き、自筆資料の詳しい相互関係や資料内容の検討方法について、バルトーク・アーカイブ現所長ヴィカーリウシュ・ラーズロー-Vikárius László氏とリサーチ・アシスタントの中原佑介氏をはじめとした研究員の方々より、専門的な助言を得ることができた。

前年度の調査においても、今回と同様の自筆資料を対象として調査を行ったが、約2週間弱という短期間だったこともあり、対象資料の全体像の把握と一部の資料内容の検討に留まっていた。資料内容の検討については、具体的には《ピアノ・ソナタ》BB88のスケッチ2種、第一草稿と第二草稿のそれぞれ一部、手書きの清書譜、手書きの訂正を含む印刷譜、《戸外にて》BB89の手書きの清書譜の一部までに留まっていた（前頁表1参照）。博士論文での主軸となる作品分析に活かすためには、資料の全体像の把握では不十分であり、資料内容を検討することが必須の作業となるため、今年度の調査においては、昨年度の調査でやり残した資料内容の検討を第一に調査を進めた。

その結果、新たに《ピアノ・ソナタ》BB88の第一草稿と第二草稿の全て、《9つのピアノ小品》BB90の手書きの献呈譜、手書きの訂正を含む印刷譜の内容検討を遂行することができた。これは大きな進捗と言える。何故なら、昨年度の成果と合わせると、《ピアノ・ソナタ》BB88の自筆資料の全てについて内容の検討を遂行することができた結果になるからである。特に《ピアノ・ソナタ》BB88の第一草稿については、インクで黒く塗りつぶして訂正している箇所や紙を削ってその上から書き直しをしている箇所、後から吹き出しの形で小節を書き加えている箇所、矢印によって小節の配置を入れ替えている箇所などが混在しており、譜面が非常に複雑な状態となっている。そのため、全編に渡って写譜によって記録を取る必要があり、大変時間の要する作業だった。この作業を終えられたことは大きな成果であると同時に、この資料は、本調査活動の目的である「作品の成立過程を検討」する上で多くの示唆を与える重要な段階の資料であることから、今回の調査で得られた成果は今後の博士論文研究においてもかなり重要な位置を占めることになる。そして次の段階として、内容を検討したひとつひとつの資料を横断的に観察し、加筆・修正の経緯を辿ることで作品の成立過程をより明確にすることが、今後の課題となる。

また、《9つのピアノ小品》BB90の自筆資料について、全体的な内容の検討を行えたことも成果として大きい。この作品は先行研究においてはあまり取り上げられてきておらず、自筆資料に関する研究も報告者が現在確認しているところでは見当たらないが、今回の調査で、作品の成立過程を検討する上で重要な加筆・修正箇所が多数あることを確認することができた。しかしこの作品と《戸外にて》BB89に関しては、未だ全ての自筆資料の内容検討には至っていないため、引き続き現地での調査が必要不可欠である。

3.2 『「バルトークとピアノ」音楽学プログラム』への参加

本調査活動では、バルトークのピアノ作品に関する講義及び研究発表を聴講し、最新の研究動向の一端を知ることができた。代表的なバルトーク研究者による講義が3件と、博士課程学生による研究発表が10件で構成された。

各国の博士課程学生たちによる研究発表では、バルトークのピアノ作品の分析のみならず、彼自身のピアノ演奏の分析を行っている発表もあった。作品分析に関しては、報告者と同じく1926年の作品に注目した発表が2件あった。1つは《戸外にて》BB89より第4曲〈夜の音楽〉を対象としたもので、当該楽曲も扱う報告者にとって大変参考になった。もう1つは、バルトークが1926年の直前におこなっていた、イタリアのバロックの鍵盤作品の編曲と、1926年のピアノ作品のスタイルとの関わりがテーマとなっており、このトピックについては報告者も注目する所であったため非常に興味深かったが、同時にこれら編曲作業についての研究がまだ始まったばかりで、不十分であることも分かった。

また、代表的なバルトーク研究者による講義では、同じく 1926 年作曲の《ピアノ協奏曲第 1 番》BB91 に関するものがあり、貴重な経験となった。さらに、作曲年代はずれるが、1914～1920 年のピアノ作品の自筆資料に関する講義では新たな発見が示され、彼のピアノ作品全体を見通す上での重要な知見を得ることができた。

上記のように、本調査活動ではバルトークのピアノ作品をめぐる最新の研究動向やその課題について、近似の主題のみならず多方面から重要な知見を得ることができた。

3.3 「トカイ収穫祭 2019」における民俗音楽演奏の現地調査

本調査活動では、「トカイ収穫祭 2019」における野外ステージでの民俗音楽セッションを撮影・記録し、また当該公演を観覧していたトカイ在住の中年男性から、民俗音楽や収穫祭の様子についてインタビューを行うことができた。

「トカイ収穫祭 2019」は 2019 年 10 月 4 日（金）～6 日（日）の 3 日間、午後 2 時～深夜 0 時頃まで開催された。トカイのメイン・ストリートである Rákóczi utca には道の両側に露店が並び、通りから続く中央広場と呼ばれる Kossuth tér には野外ステージが設けられていた。この野外ステージでは、地元の人々の出し物が行われたり、トカイの各ワインセラーが集合してパレード付きのセレモニーを開催するなど様々な公演が行われており、そのひとつとして民俗音楽セッションが開催された。報告者の都合により、10 月 4 日午後～10 月 5 日 16 時頃までしかトカイに滞在できなかつたため、今回撮影できたのは 10 月 5 日 14 時から約 1 時間半行われた民俗音楽セッションのみであったが、民俗音楽関連のイベントはこれが全てではなかつた。

今回撮影した民俗音楽セッションは、基本的には歌を伴わない器楽セッションで、ソロのヴァイオリン 1 本、伴奏のヴァイオリン 1 本、コントラバス 1 本、クラリネット 1 本、ツィンバロン 1 台の 5 種編成、いずれも中年もしくは老年男性が演奏していた。ステージ上に歌手が登場することはなかつたが、積極的にインタビューに応じてくれた中年男性によれば、元々は歌で歌詞の付いた音楽を器楽編成にして演奏しているだけのようで、しばしばセッションに合わせて観客側から声を張り上げ民謡を口ずさんでいた。民謡の歌詞の意味についても、簡単ではあるが訊くことができた。

また、今回調査した民俗音楽セッションについては観客は驚くほど少なく、同男性によると、20 年前は広場がいっぱいになるほど人が集まり全員で民謡を歌ったそうで、若者の無関心を嘆く一面も見せていた。

以上のように、本調査活動では実際の民俗音楽を体験し記録するのみならず、こうしたイベントと地元の人々との距離感やその時代的变化についても知ることもできた。

3.4 音楽史博物館及びバルトーク・ベーラ記念館

「音楽史博物館」では、ハンガリー音楽史上重要な役割を果たした音楽家の資料と、18 世紀半ば～20 世紀半ばに実際に使われていた様々な楽器を閲覧することができた。ハンガリー音楽史上重要な音楽家については、バルトークも学び、教鞭をとり、現在でも中心的な役割を担っているリスト音楽院の設立にまつわる音楽家たちの資料を概観し、ハンガリーでのクラシック音楽界の系譜をたどることができた。また実際に使用されていた楽器については、ショーケースに入れられることもなくそのまま展示されていたため、かなり至近距離から観察できた。解説のパネルなどはさほど充実しているわけではなかつたが、例えば古いピアノのフレームの形や押さえの形状の違い等を直接観察することができたのは、貴重な体験だったと言える。

「バルトーク・ベーラ記念館」では、バルトークが日常的に使用していたさまざまな物を間近に観察することができた。家具や衣服はもちろんのこと、所持していた民俗楽器や自筆の楽譜、自費出版の書籍なども閲覧できたのは、博士論文研究を進める上で貴重な体験だった。中でも興味深かったのは、バルトークが幼少の頃より趣味としていた、虫や貨幣、貝殻などのコレクションだった。虫は小さな個体であっても綺麗に標本され、貝殻には内側に分類のような自筆の番号が振ってあった。これらの物品から感じた精巧さは、バルトーク個人の趣味嗜好やパーソナリティについて洞察する上で助けになるだろう。

4. まとめと今後の課題

本海外調査研究では、博士論文研究で扱う事象に対して多角的に検討し得る成果を得ることができた。

自筆資料の調査では、昨年度の調査の約 2 倍の期間をかけ、《ピアノ・ソナタ》BB88 については全ての自筆資料の内容検討を行うことができた。ひとつひとつの資料を丹念に検討していく中で生まれた疑問点等は、バルトーク・アーカイブの方々からの助言によってより専門的な見方を学ぶことができた。『「バルトークとピアノ」音楽学プログラム』では、各国の博士課程学生と代表的なバルトーク研究者らの発表により、近似の主題を扱う最新の研究動向はもちろん、その課題やバルトークのピア

ノ作品全体を見通す上での重要な知見も、同時に得ることができた。トカイ収穫祭での民俗音楽現地調査では、民俗音楽の実態に触れるのみならず、地元の人々と民俗音楽の距離感についても垣間見ることができた。さらに音楽史博物館とバルトーク・ベーラ記念館への訪問では、ハンガリーにおける音楽史の背景とバルトークのパーソナリティに関わる部分について、多くの示唆を与えてくれる資料を閲覧することができた。

今後の課題として最も特筆すべきは、自筆資料調査の継続である。今回の調査の最後に、残りの資料の複雑さ具合も含めた概要を観察することができたため、あと1ヶ月程の調査で対象資料の内容検討を遂行できるとの明確な推測も立っている。時間の要する作業ではあるが、これら自筆資料の検討を丹念に行うことは作品分析を行う上で必須の作業となるため、必ず継続的に行っていきたい。また民俗音楽の現地調査についても、今回のトカイに留まらず他の地域での調査も行うことで、民俗音楽についての知見を深め、多角的な視点から捉えるための課題として取り組んでいきたい。

5. 謝辞

本調査研究は、お茶の水女子大学文部科学省特別経費（国立大学機能強化分）「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」プロジェクト「学生海外派遣」プログラム 2019 年度「学生海外調査研究」の助成を受けて行ったものです。準備段階から多方面でご指導くださいました、永原恵三先生をはじめとする日本の皆さま、ブダペストでお世話になった全ての皆さまに、心より感謝申し上げます。

注

1. ハンガリーでは、日本と同じく人名は姓・名の順で記される。以下では、ハンガリー人名についてはこの規則に倣うこととする。
2. 作品名の後に続く BB を冠する番号は、ブダペスト・バルトーク・アーカイヴ元所長シヨムファイ・ラースロー Somfai László 氏によって作成された、バルトークの作品目録番号である。
3. 本稿で言う「民俗音楽編曲作品」とは、バルトークやその同僚たちが実際に収集した民俗音楽の旋律をそのまま引用して作曲された作品のことを指す。

参考文献

- 羽仁協子 (1970) 『ある芸術家の人間像 -バルトークの手紙と記録-』 富山房。
- 伊東信宏 (1997) 『バルトーク：民謡を発見した「辺境」の作曲家』 中央公論新社。
- 伊東信宏 (2010) 「作品解説」『バルトーク集 2』 春秋社。
- 岩城肇(編訳) (1992) 『バルトーク音楽論集』 御茶ノ水書房。
- 木村優希 (2015) 「バルトークのピアノ独奏作品における民俗音楽編曲の特徴～アーティキュレーションを中心に～」 お茶の水女子大学卒業論文。
- 木村優希 (2018) 「バルトーク作曲《ピアノ・ソナタ》BB88 第 3 楽章の研究」 お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科修士論文。
- Lampert, V. & Somfai, L. 谷本一之・横井雅子(訳) 1996 「バルトーク, ベーラ」『ニューグローヴ世界音楽大事典』 13, 講談社。
- Somfai, L. (1990) The Influence of Peasant Music on the Finale of Bartók's Piano Sonata, *Studies in Musical Sources and Style: Essays in Honor of Jan LaRue*, Madison, 535-555.
- Somfai, L. (1996) *Béla Bartók: Composition, Concepts, and Autograph Sources*, California : University of California Press.

きむら ゆうき／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

木村優希さんによる今回の現地調査は、昨年度に助成を受けて調査した成果を生かし、1年足らずの間に問題点と課題を整理した上で計画したものであったが、自筆資料の調査対象を絞ることで、より詳細で深い内容を得ることができている。ブダペストでの音楽学シンポジウムに参加できたことや、都会での民俗音楽のフィールドワークなど、第一級のバルトーク研究者になるための基礎固めをする活動ができたことは大いに評価できる。そして、海外の現地調査を2年続けて実施できたことの意義

は、バルトーク研究あるいはハンガリーの音楽研究の多くの研究者と交流をもち、ネットワークを構築できたことにある。様々なレベルでの人間関係の構築は、多くの時間を必要とすることではあるが、研究活動をしていく上で何にも優ることであり、大学からの支援があったからこそ実現できたことである。したがって、本現地調査は極めて高い成果が得られたものであると評価する。

(人文科学系・永原恵三)

Research for the Autograph Sources of Bartók's Piano works in 1926 and Fieldwork of the Folk Music Performances in Tokaj Harvest Festival 2019

Yuki Kimura

The aim of this research is mainly the investigation about the autograph sources of Bartók's piano works written in 1926, and the fieldwork of the folk music performances in Tokaj Harvest Festival 2019. In the investigation of Bartók's autograph sources, I was able to examine about the process of the compositions. In the fieldwork in Tokaj, I experienced today's folk music performances, and knew the relationships between folk music and people who live there. It is necessary to continue the research about the autograph sources and the fieldwork in the other regions in order to analyze his piano works more deeply.